

I 特集 青少年期における  
自然体験の意味

## 特集 青少年期における自然体験の意味

日時 平成 26 年 4 月 25 日（金） 16：00～17：00

出席者 飯田 稔 びわこ成蹊スポーツ大学学長  
田中 壮一郎 国立青少年教育振興機構理事長  
岡島 成行 国立青少年教育振興機構理事

### 青少年教育の意義と役割

**岡島** 本日のテーマは「青少年期における自然体験の意味」ということでお話をいただきます。最初は、ジャンルの大きいところからいきますが、青少年教育についてです。青少年教育というのは、ジャンルとして学問としてもまだ認められていないのかもしれませんが、田中理事長は文部省での長い行政経験があって、また国立青少年教育振興機構の理事長としてのご経験がありますので、そういう中からお考えになる青少年教育というものをお話してください。それについて、飯田先生と私から、質問や意見を出すところからスタートしたいと思います。

**田中** この豊かで便利な世の中において、昭和 59 年に臨時教育審議会が発足し、教育改革がスタートしてもう 30 年も経つわけですが、臨教審が発足した当時は、中学校における校内暴力等の問題行動や高校の中途退学が大きな社会問題となっていました。

しかし、平成に入って、特に平成 10 年頃に顕著になったと私は思っているのですが、新たな課題が生じてきているのではないのでしょうか。一つは、昭和 61 年頃から子供の体力が長期にわたって低下し、それが広く認識され始めたのが平成 10 年頃でした。子供たちの体力は、調査を始めた昭和 39 年以来上昇しましたが、昭和 50 年頃から昭和 60 年頃まで、受験競争が激化した時期は横ばい、そして、昭和 61 年頃からゲーム機等が子供に普及するにしがたい、体力が長期的に低下しました。

二つ目は、問題行動の低年齢化です。従来の「教育荒廃」は、中学校の問題でしたが、近年は小学校でも「学級崩壊」という状況が見られるようになり、平成 10 年頃には社会問題化して、国立教育政策研究所でその調査研究が行われました。この調査研究によれば、「学級崩壊」という現象は小学校の 1・2 年生でも生じています。これは、もはや学校教育だけの問題ではありません。すなわち、子供たちは生まれて以来、まずは家庭で、そして地域社会において色々な体験をする中で一定の生活習慣やしつけが備わって学校に上がってくるのですが、この学校に入る前の段階の様々な体験が不足し、しつけ、あるいは



田中 壮一郎

身辺自立等が十分できていない子供が入学してくるようになったのではないのでしょうか。近年、幼児期から小学生の半ばぐらいまでの間に地域社会で生活体験や自然体験など色々な体験をし、世の中のルール等を身につけてくるというスキームが少し弱りかけてきているのでしょうか。

もう一つは、大学全入時代の到来です。選ばなければ誰でも高校や大学に進学できる時代となった訳で、勉強に対する意欲の低下、勉強しない子供の増加が懸念されています。

そういう中で、私は平成18年に「早寝早起き朝ごはん」運動を立ち上げました。要は、子供たちの生活習慣の確立をはじめとするしつけや教育、言い換えるなら子育てに地域の大人が協力して取り組もうという運動です。

臨教審は、個性尊重及び変化への対応とともに、生涯学習体系への移行を提言しましたが、私は、生涯学習社会の実現ということを見れば大いに進展してきたと思います。すなわち、一旦社会に出てからも、再び大学で学ぶ機会が充実されるなど、様々な学習機会が用意され、それを選択して学習することができるようになりました。

しかし、臨教審は、生涯学習社会について横軸の意義も指摘しています。すなわち、青少年期の教育について、学校教育が肥大化しすぎており、家庭や地域の教育力の再生の必要性です。「早寝早起き朝ごはん」運動も、平成22年にスタートさせた「体験の風をおこそう」運動も、この横軸の生涯学習社会の実現に向けた取り組みでもあります。

昔なら、子供たちが生まれて、親御さんや近所の人たちにかわいがられながら色々な体験をし、そういう中で様々な資質が自然に育ってきたというか、それほど意識されずに発達段階に即した色々な体験ができていました。しかし、今の世の中は、子供たちが色々な体験をする場や機会を大人が意図的・計画的に用意する必要があるのだと思います。ただ、大人が個別の活動にああしろ、こうしろと口出しするのではなく、まさに場や機会は準備するが、大人は外で見守り、子供たちが色々な集団で様々な活動に参加できるような地域づくりをする必要があるのではないのでしょうか。

もう一つ申し上げれば、我々の機構は体験活動を通じた青少年の自立を目指しているのですが、自立という言葉が、今日、精神的なものに主眼が置かれすぎているのではないかと思います。私もこの機構に来たときに、機構の皆さんに、自立とは何と聞いたら、自分のことを自分で律してどうのこうのと言う説明を受けましたが、私は、人間が自立するということは、大人になったら自分で働いて食っていくことだと思っています。しかし、それだけでは駄目だということで、自分で考え自分で判断し、また自分の行動を自分で律することができるよう教育してきたのだと思います。その基本を忘れてはいけないと思います。

**岡島** 体力や問題行動、全入という問題があるけれども、その根本的なところで、幼児期のしつけができていないというようなところから、「早寝早起き朝ごはん」、つまり、その基本を実践したということですね。

私らが子供のころは貧乏だったという意識がものすごくあったのです。日本は貧乏だから、働かなければならないと思っていました。私は、まず大学に行かせてもらって、出たら親を食わせる、そんな気持ちもちよっとあったような気がします。

**飯田** 私が注目したいのは、平成10年ごろです。我々の分野の自然体験とか野外教育にとっても、実はここが一つの大転換期だったのです。例えば「青少年の野外教育の充実について」ができたのは平成8年なのです。これは、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議というところで、私もこの座長をさせていただいていたのですけれども、実はこのころから急激に教育とか子供についての変化があらわれ始めたのです。そういう意味では、田中理事長が言われた、平成10年が境になるのではないかというのは、私も大変注目しているところなのです。

何でこの「青少年の野外教育の充実について」というのが出てきたのかというと、基本的には学校教育が知識偏重過ぎたという反省がまずあったわけです。例えば、生きる力の育成を教育の方針にするというのもこのころ出てきたことですし、それに伴って総合的な学習の時間が出てきたり、学校制度そのものも学校5日制に変わっていくとか、そういうのが学校教育に対する批判として実はあったのではないのでしょうか。その根本は何かというと、いわゆる問題行動ですね。

翻って、今までに何がなされてきたのでしょうか。確かに「青少年の野外教育の充実について」というところでいろいろな施策を出しています。特に野外教育月間をつくったり、相当な改革がこれで行われたと考えています。

ところが、いつの間にかそれが弱くなって行って、軽視されて、予算の面でもそうですし、施設のほうもそうですし、いろいろなところで衰退していきました。国の方針というのを考えると、中長期の目標というのを掲げないと、一時的な対症療法としてその場しのぎでどんなことをやっても、将来にはつながっていかないかと強く感じたのです。

その結果、今が悪いということではなくて、総合的な学習の時間などというのはもう減らそうではないとか、なくてもいいという極論まで出てきていますし、知育偏重だと言われたことに対しても、OECDとかそういうのと比較してみると学力が低くなっているということで、また知育偏重に戻っています。5日制の学校制度にしても、最近では土曜日をやってもいいのではないかとされています。

さらに、道徳を教科としてやるとか、小学校も英語も入れろとか、IT関係は授業でもっと進めていくと言われてしています。そうすると、同じ時間しか子供は学校にいないのに、実際には物すごく詰め込まれています。そういうものの反動もあって、実はこういう社会ができてきています。確かに、生活も豊かになったし、物はそろっています。それなのに何でとみんな疑問に思うわけです。

逆に言うと、人間そのものには苦勞だとか目標に向かって努力したりする人間性というのがあって、それがなくなるところでは人間性がだんだん失われていくのではないかという感じを持っているのです。

**岡島** ありがとうございます。田中理事長が先ほどおっしゃった、大人が意図的に準備するということですが、自然体験みたいなものもそうなのですね。昔、私らの子供のころは子供だけで遊べたわけです。けれども、今は子供だけで遊ぶと、川に行ったら流されてしまいます。

だから、大人が準備して、子供がそれをこなせるようになって、大人が手を引いて、子供たちだけで昔のように自然に遊びに行ければ一番いいのですけれども。「早寝早

起き朝ごはん」なんて当たり前ではないでしょうか。誰もがやっていたことをあえて言わなければいけないということですが、ここがどうしても政策的にやらざるを得ないですかね。

**飯田** 大人がそういう機会とか体験の場を用意しなくては今はできないということで、そういう意味では時代が変わったし、誰がやるのかということも、ただ単に親任せでやっても、夫婦共働きでやっていれば、休みになったら疲れるし、子供を外に連れて行って遊ばせてやろうと思ってもなかなかできないですね。

**岡島** ちょうど介護も同じですね。介護も昔は自分のうちでやっていたのだけれども、それがお金を払って面倒を見てもらうようになったこととよく似ているかもしれません。地域社会の崩壊なのですかね。

**田中** 従来から、放課後、校庭で遊んでいた子供の死亡事故が発生したことで、その後、放課後校庭で遊ぶことは禁止にするというような事例が見られたのですが、近年は、それがひどくなっているのではないのでしょうか。鹿児島だったでしょうか、洞窟でろうそくを立てて子供たちが遊んでいて、酸欠になって亡くなったという事故が生じた際、日本中の洞窟を探して、閉鎖して入れないようにしてしまいました。こういうことをやっていたら、子供の活動がどんどん狭くなってしまいます。安全な遊び方を教えることが大切ではないでしょうか。

**岡島** 何もしなければ安全ですね。けれども、山も行ってみたり、川で泳いでみたり、そこで冒険に踏み出さないと人間は成長しないわけです。今は、そののころをとめてしまっています。そこを大人が意図的に、普通のお父さんやお母さんが心配する範囲の中で、おりで囲ってでも遊ばせるみたいなことをしなければいけなくなってしまっています。

**田中** 私が香川県の教育長の時の話ですが、当時は高校生のバイクに関して「三ない運動」というのがありました。高校生には、バイクを買わない、乗せない、免許をとらせないという三原則で、これは昔、香川県高等学校 PTA が提案したのだそうです。教育長に就任してまもなく県警本部長が来られ、三ない運動をやめてくれないかというのです。乗せないのではなくて、きちんと安全な乗り方を教えて、必要な子には利用させることが大切だというのです。今日、子育て全般で危ないことはやらせない、日常的にそうなっているのではないかと大変心配しています。

**岡島** そうですね。脳の研究をしている黒川伊保子先生が言っていたけれども、ゲームばかりやっていると脳の発達が止まるらしいですね。それから、解答が必ずある問題ばかりトレーニングするものだから、解答のない問題に直面したらアウトになってしまうわけです。

**田中** もう一つ心配なのは、経済的に余裕のある親はお金を払って、多少危険なことも含めて様々な体験の機会を与えています。一方、生活が苦しい家庭では、親も忙しく、子供たちはテレビやゲームに偏った生活になっている傾向が指摘されています。経済的な格差が「体験」の格差につながっているのではないかと心配されています。

**岡島** 勉強格差もあるでしょうが、体験格差といえますね。

**田中** 国・公立の青少年教育施設は、まさに、すべての子供たちに開かれた体験の場を提供しています。今日、その必要性は益々強くなっているのではないのでしょうか。

**岡島** 青少年教育研究センターで中国と韓国とアメリカとドイツの体験施設の調査をしてみたのです。そうしたら、国家が100億近い金を投入してそういうことをやっているのは日本だけなのです。国民みんなに開かれた施設があるというのは日本だけなのです。

**飯田** そうですよ。

**岡島** 私はこれは絶対に守ったほうがいいと思う。ある意味で、民主主義の根幹のところ都在这里できているわけです。

**飯田** やはり社会が子供を育てるという風潮にはなってきましたよね。今までは各家庭、親が責任を持ってと言ったけれども、それだけではどうしようもならないので、特に生活保護を受けている家庭がこれだけ多くなってくると、これは社会でどうにかしなくてははいけません。

### 自然体験の必要性と効果

**岡島** 飯田先生はアメリカでのご経験も非常に長いので、アメリカの話、日本と似ているのか違うのかなどお話してください。最近では、アメリカでは『ラスト・チャイルド・イン・ザ・ウッズ』という本が出て、「あなたの子供に自然が足りない」と言って、自然欠乏症などという言葉が出ています。私の印象では、アメリカの子供たちは自然の中で自由に遊んでいて、日本の子は勉強しているみたいなイメージがあったのだけれども、アメリカでもやはり同じ傾向があるらしいと思いました。

**飯田** アメリカへ行って、いろいろな書物を読んだり、実際に活動に参加してみて思ったのは、やはりアメリカはアメリカ文化というのを物すごく大切にしているし、その根っこは何があるかということ、清教徒が移り住んだとか、その後のパイオニアスピリットだとか、フロンティア精神だとか、実は自然体験というのはそこに全部つながっているのです。ですから、自然体験を悪く言う人はいないし、自然体験をやったからリンカーンが生まれたのだとか、自然がアメリカの精神の形成に貢献したと信じられています。

そういう意味で、日本では自然に家族でやってきたことが、アメリカでは政治とか教育体制の中で非常に強調され、今でもそれは受け継がれていて、野外の活動の物すごく主要な部分をなしているということは随分違うなと思います。

逆に言うと、日本はそういう日本文化のよさというのを地域とかそういうところで必然的に育ててきたし、足りない部分は、親ももちろん参加したりしてやっていて、そういう点では、どちらがいいということではなくて、これからますますグローバル化時代になってくるので、そういう要素を、言葉を変えれば、異文化を知るという意味でも大事ではないかと思います。

**岡島** ありがとうございます。

**飯田** ところで、私自身は今まで実践をやってきたり研究をやってきて、大きくは三つに分類できていると思っています。一つは、自己との関係です。この自然体験とか野外教育というのは自分自身をどうやって成長・発達させるかということに大変大きな意義があると考えています。

自己評価、自分自身をどう思うか、あるいは自己概念、自分自身に対する考え方、これが日本人の場合には、特に子供は低いとされています。要するに、自分をよくしたり、社会をよくするというようなことだとか、毎日が生き生きとして楽しいだとか、未来は明るいだとか、自分は努力すればかなりのことができるだとか、こういう項目で日本は極端に低いのです。

これはなぜなのかなといろいろもめているところです。自己概念の考え方についての違いもあることは確かでしょうけれども、子供がそういうことを体験的にしていなくて、自分自身に自信を持ってないということが根本にあるのではないのでしょうか。そういう意味では、こうした自然体験というのは、自然の中という場が大事なのです。自動車で行くこともできなければ歩かなくてははいけません。水の確保にしても、谷川に行くとってこなくてははいけません。そういう不便さがあるような自然というのが大事です。

そして、集団生活です。人から学んだり、自分自身を見直したり、そういう機会ができる非常に特異な場だなと私は思っているのです。実は社会というのは勝敗です。勝つか負けるかという競争の原理が中心になっているのですけれども、自然体験では競争というのではなくて、協調とか協力というのが主になっています。

その効果は、自分自身についての考え方、見方がポジティブにプラスになっていくということです。私たちの研究でも、例えば自己概念の調査をやって、キャンプが終わってから見てみますと、自分の能力を伸ばせるようにいろいろなことをやってみたい、外国へ留学したいとか行ってみたいとか、自分が決めたことは最後まで努力すると結局はその夢がかなうといった結果が出てきているわけです。特に女子にその向上が顕著です。

二つ目は、社会性の育成です。その中でも特に対人関係です。人間関係をどう構築していくかということが大きな問題であると思っています。例えば、いじめの問題があったり、暴力の問題が明らかになってきています。そういうことを考えると、人間関係というのは非常に大事だなということで、これも先ほどの自然とか集団生活、競争の原理ということ、その要素があるからこそこういうのができるのだと思います。

例えば、先ほど冒険教育というのが出てきましたけれども、私たちはソロというのをやっているのです。山の中でたった1人で一晩過ごします。自分で御飯もつくって、寝床もつくります。その中で子供はおもしろいことを言っています。感想文に書いてあったのですけれども、人間だったら誰でもいい、そばにいてほしい、そのくらい思うということです。そして、いいことが書いてあるのですね。いじめっ子も一回やってみたら絶対変わると書いてあるのです。

それから、キャンプとか自然体験というのはコミュニティの機能というのを実は持っているのです。政治も経済も食っていくことも



飯田 稔 氏

全てそういう機能を持っていて、自分たちが主になってやっていかななくてはいけないということで、そこには社会的な規範とかルールとかというのがあるわけです。それを知るわけです。それから、自分でそれができるようになっていきます。そして、それに向かってよりよい社会を築いていきます。こういうレベルというのが自然体験を通して随分できると思います。

三つ目は、人と自然との関係ということです。特に環境教育という問題が出てまいりましたし、今、原子力をどうするのかという問題も大変重要なことであって、一番大事なのは、人間というのは自然の恵みによって生きていけるのだよということを知ることだと思ふのですね。

私は、立松和平さんの著書の中で非常に感心したのは、自然というのは、何の見返りもなく雨を降らせてくれたり、木を育ててくれたり、農作物をつくってくれたり、人間に対して恩恵を、あるいは幸福を与えてくれますが、決して報いを求めることはないということを書いています。確かにそうだなと思います。

先ほど言ったように、自然に対する感謝の気持ちだとか、人間の歴史的なつながりをずっと追っていくとか、生態系も大事ですし、そのようなことを全て含んで人と自然の関係というのをもう一回真剣に考えてみる必要が今まで余りにもなかった、軽過ぎたと思いますね。

とにかく自然の真っただ中に子供を置くということが一番基本だと思います。それは何よりも大事であって、そこで何をどうしようとかというのは次の段階であると考えています。

もう一つは、橘直隆先生が調査したもので、どういうキャンプの形態が生きる力に一番効果的なのかというのを実際に挙げてもらったら、天候が悪い、テント生活、自炊ということでした。それは結局、物の見方、考え方が違ってきて、例えば、雨が降らなかったらいつでも靴をおっぼり出しているでもいいけれども、最初に雨が降ると、これはテントの中に入れておかないと大変だとか、火を一つおこすにしても、ご飯を炊くのはみんな協力しないととてもできないとか追い込まれるということです。それから、同じ寝るにしても、宿泊所に泊まるのではなくて、テントに泊まって、できるだけ自然に近いほうが効果があるというのも言っています。

先ほどソロの話が出てきました。子供が書いたものですが、これほど感心したのがあります。夜1人になっていろいろ考えて眠れないわけですね。けれども、よくよく考えてみたら、ほかの動物というのは山の中でみんなソロをやっているのではないか、人間も動物だ、同じだ、ソロをするのは当たり前だと思ったらそれを考えているうちに眠くなって寝てしまったというのがあります。そのような過激な場面に置かれるといろいろな考え方が出てくるのではないのでしょうか。それが創意とか工夫につながっていくのではないかというのがこうした自然体験の大きな意義だろうと思います。

**岡島** ありがとうございます。山の道具はわざと雨の日に買いに行くのです。今、先生がおっしゃったように、晴れた日に買うと、1万円のヤッケと5,000円のヤッケを見ると5,000円のものを買ってしまうわけです。大丈夫だろうと思うからです。雨の日に買いに行くと、やはり死ぬかもしれないから、高くても1万円のものを買おうとするのです。

先生が最初おっしゃった自己概念というのは、私も大妻女子大学で、もう10年ぐらい前ですか、13mの高さの木の板があって、そこに岩登りして、上からみんなでロープを垂らして引っ張るといふものがあるのですけれども、雨の日にそこに初めて10人ぐらいで登っていて、1人、細い子だったのですが、上のほうまで行けた子がいました。みんなで応援したら、落ちそうになりながら登ったのです。1人が登ったら、残った子は全員登れるわけです。登れないと思うから登れないので、あの子が登ったら私も登れると思うのです。

後で感想文を見たら、その子は、私はいつもだめな人間だと思っていた、自分に自信が持てなかった、きょうは本当につらかったけれども、みんなが言うからしょうがないから登ったのだけれども、先生の言う、やればできるといふことがわかったと書いてありました。

これは言葉で言ってもだめですよ。やはり自然の中でみんなでやるということが大事です。

**飯田** 体験が必要なんです。

**岡島** 私は本当に奥の山に入ることが多いのですが、そうすると、五感が鋭くなりますよ。怖いからです。夜1人で深い山に行くと、はぐれて、しょうがないから1人でビバークなどをして、翌日追い駆けたりするでしょう。夜、カサカサッと音がすると、熊かなと思ってびくっとするわけです。ありとあらゆる全知全能の五感を自然に働かせるようになってしまうのです。

今西錦司先生が、「私はぼけない、なぜならば、毎月山に行くと五感を磨いているから」と言っていましたけれども、確かにそうです。自然の中に人間が1人で入ることによって、においと、耳とか、風が吹いてきたら、そよ風だって感じるようになるでしょう。人間というのはたった1日で感じるようになりますね。

**飯田** 先ほど幼児のころからが大事だとおっしゃっていましたが、今でも、5歳児を対象に4泊5日、親から離して幼児キャンプというのをやっているのです。私が感心したのは、天の川が物すごくきれいで、すばらしい星空だったのです。それを見て幼児が、星が怖いといふのです。多分、余りきれいなのでそういう表現をしたのでしょう。ああ、きれいだとか、うわあ、すごいではなくて、怖いといふのです。いわゆる畏敬の念です。そのくらい神経をとがらせて本物に迫っている体験なのだなと思いました。

**岡島** 小さい子ほど感じるものが鋭いでしょうから、田中理事長がおっしゃったように、幼少期に、親と一緒にいてもいいけれども、そういうところに入れてあげることが、先ほどの自然の恵みではないですが、自然から来る物すごいプレッシャーといふようなものを、子供は感じるでしょうね。

**田中** そのとおりですね。

### 自然体験の背景にあるもの

**岡島** ところで、日本サッカー協会のトップレベルのS級指導者がトレーニングで3週間だけ合宿生活を行って、最後に感想文を書かせると、何が印象に残ったかと言っ

たら、ASE（野外活動）が一番だそうですね。サッカーのことを覚えていなくて、筑波大学の野性の森でやった自然体験のトレーニングが一番印象に残ったと書いてあると言っていました。

**飯田** 毎回そうなんですね。

**岡島** だから、日本サッカー協会の田嶋幸三さんが我々にエールを送ってくれました。自然体験は、日本は世界に打って出るべきだと言っていましたよ。

**飯田** 先ほど田中理事長のほうから自立ということで問題提起をなされていて、まさにそのとおりで、大人になって働いて食っていくことが当たり前なのが、なかなかそうできていないという若者がどんどん増えています。一つは、働きたいけど働けないとか、フルタイムではなくてパートタイムとしてしか働けないとか、今は3分の1がそうだと思いますから、そういう社会構造そのものもあるのでしょうか。しかし一方で、本人の側には何が欠けていたのかということも十分考えなくてはいけないと思うのです。根本的には、生命、生きるということをどう考えていくかということだと思います。あるいは考えたことがあるのかどうかということに尽きるのではないかと思います。今、若者にとっては、戦争がなければ死などというのを考える必要はほとんどないですし、そのような死とか生命に対する考え方に思いをめぐらすような機会というのが多分ないのではないのでしょうか。死に損なったよというのは昔はよくあったのだけれども、今の若い人とか子供などはほとんどないですね。

**岡島** ないのですね。行ってはだめといわれます。よい子は川で遊ばないということです。

**飯田** 禁止されて、囲い込まれた牧場みたいな中で言うとおりに育っているというのは、若者の中にも根本的にあるのではないのでしょうか。

**岡島** 先ほど先生がおっしゃったことに私も全く同感なのです。自然と人間の関係ですね。そこを小さいなりに、高校生なら高校生なりに、自分なりに考えてみます。そうすれば、誰も感じるのだけれども、例えば足の悪い子とか目の悪い子がいたりすると、健常の子は丈夫な体だけで幸せに感じるでしょう。そして、生きていくことが幸せだし、お金があろうとなかろうと、貧乏でも幸せだし、その基本的なところに思い至る。生きていくことが幸せだということを感じないまま、人と自然を感じないで、人と人の関係ばかり考えてしまうから、その感謝の気持ちがないのです。生きることに對する感謝の気持ちというのを、心の底から「そうだな」と思える機会がないのです。例えば、わずかな経験ですけれども、雨に降られて、凍えて、もう死んでしまうのではないかと思いついて歩いたことによって、暖かいところに入ると、どんな御飯でもおいしいと感じます。そういうつらいところを通過すると、おいしいものが欲しいとか言う子でも、お腹が減っているから何でも食べられます。そういうお腹を減らした経験があれば、日ごろ食べないはずのものでもおいしいわけだし、そういう経験が何かないと、感謝の気持ちというのは、その辺が感じられません。

ところで、日本には日本のよさがありますね。それでアメリカの野外体験のよさがありますね。その2つがうまく合流できないかなと思うのです。アメリカの開拓者、インディアンのほうではなくて白人ですけれども、白人のアメリカ人というのはナイフで生きていかなければいけないと、400年かかってみんなそう思っているわけで

す。日本はそうではなくて、先生がおっしゃったような、みんなで育てていくという伝統があって、両方とも大事で、それぞれの文化、伝統、思想を自分たちの国で守ってきているわけです。日米シンポジウムとか、そういうものを作って意見交換をしたらおもしろいのではないのでしょうか。

**田中** 政策の良い点を導入することは大変重要なのですが、私は最近若干心配していることがあります。それは、例えばPA（プロジェクトアドベンチャー）の活用をみると、何かある一部だけを具体化しているのではないかと心配になるのです。子供の成長は全人格的にとらえ、その上でパーツを利用することが大切ではないのでしょうか。欧米では、様々な場面で自由や主体性が重視されていますが、その背景には宗教の教えがあるのではないのでしょうか。これを見ずにある場面だけを導入しても教育効果は上がらないのではないのでしょうか。

**岡島** そうなのです。私は思うのですけれども、自然体験とかいろいろなプログラムをアメリカなどから輸入しているのが結構あるのです。しかし、基本が違う。違うということを認識しないままアメリカ流のことを教えようとするから日本では通じないわけです。だから広がらない、と私は思うのです。日本は日本、アメリカはアメリカ、それぞれ文化の違いがあって、アメリカから出てきたプログラムはアメリカの文化にちゃんと乗っかってできている、思想に乗っているのです。だから、日本に持ってくる時は変電しなければいけません。変圧器で電圧を変えて、日本人にわかるように日本型にしていかないと広がらないと思うのです。その辺のところの考察というのは大事だと思うのです。宗教とか文化とか、そういうところですね。

**飯田** 宗教は大事ですよ。

**岡島** ええ。その辺のところは今まではちょっと手薄だったかもしれませんね。自然とか野外などの部分では。

**田中** 自然体験は、まさに宇宙や生命の神秘、自然に対する畏敬の念あるいは怖さなどを感じる良い機会だと思います。

**岡島** 津波もそうですね。

**田中** 人間の社会では公平とか平等が大切ですが、自然は人間の価値観などとは全く無関係にやってきます。自分の思いとは全く違う次元の偉大な何かがあるのだというのを、大自然の中で子供たちが感じ、そういう気持ちを育むということが大事だろうなと思うのです。

**岡島** 自然の中で生かされているわけですね。

**飯田** 今言われたように、アメリカの教科書はどれを見ても、スピリチュアルバリュー、宗教心、これを培う、ということが必ず書いてあるのです。日本の場合はそこまでは書いていないのです。精神的な云々とか書いてあるけれども、実は宗教心です。そのもとというのはやはりキリスト教なのですね。

例えば沈黙の時間を通じて、1時間、キャンプ場でたった1人になって、それで物思いにふけて、その中でそういうことを考えてみるとか、そういうのがプログラム化されているのです。今はそれはないですね。夕方になったら食事をつくるので忙しいで終わってしまっているけれども、そういう点は、言われるとおりに、宗教というのは非常に重視されているなと思いますね。

岡島 だから、宗教と文化と自然というようなところをどこかで誰かがちゃんとつなげていかないとはいけません。やはり学問的研究というのは必要だと思うのです。学問的に研究しないとみんな納得しませんよね。それはお前の考えだろう、で終わるけれども、ある種、論文みたいなものが重なってくればみんな納得できるので、飯田先生のなさっている日本野外教育学会などでもそういう論文が出てくるといいですね。青少年教育研究センターなどからもそういうものが出てきてもいいと思います。これは、なかなか大事なところだと思います。

### 指導者養成の課題と展望

岡島 さて、そろそろ収束に向かわないといけないのですけれども、私のほうで、先ほど田中理事長もおっしゃったし、飯田先生がおっしゃった点などを、今度は現実にそのようにしていこうといったときに、大人が意図的に準備したり、自然体験のよさ、人間関係を育むというような場合でも、どうしてもそこで、現時点では教える人、指導者というのをよくよく考えないといけません。一番心配しているのは、例えば草野球で、おじさんみたいな人がくわえたばこをしながらノックして、ばかやろうなどと言っているチームがあるのです。あれではろくな子供が育たないと思うのですね。例えば、自然に感謝する気持ちを持った指導者が教えれば子供もそうなります。指導者というのはいろいろなレベルがあって、細かく言うときりがありませんけれども、やはり自然に連れて行ってあげたり、自然の中で説明したりする指導者というのをどうしても整備しておかないといけないのではないのでしょうか。

サッカーは、トップクラスのS級から草サッカーのD級まで様々な指導レベルがあります。草サッカーのおじさんたちに2日コースというのがあるらしいですね。今、民間団体と国立青少年教育振興機構とで整備し始めている一番易しい部分から徐々に上げていこうという試みも、今回、民間と国の機関とが初めて一緒になってやっているということで、飯田先生のところの日本野外教育学会などの研究的裏打ちとか、そういうのと一緒になってやればいいのではないかと思うのです。

飯田先生が前におっしゃっていましたが、指導者というの、その分野のすそ野が広がっていないと成り立ちません。このところをどうするかです。プロで食っていけるほどの指導者というの、国公立のところは税金が出ているから、それでいいけれども、民間ではまだなかなか難しいです。民間で働いていると、自分を磨く時間が少ないです。目先のテクニックのことだけで、キャンプをやって、山に登って、何かアクティビティをやって1日が終わって、疲れて寝てしまいます。だから、勉強する時間だとか、今言ったように、自然に感謝する気持ちをもう一回勉強し直す機会が余りない。その辺の



岡島 成行

ところも含めて何かやらないといけないかな、と思うのですね。

自然体験を楽しむ人が増えるのと、それの上に乗ってプロが生まれるという構図があるのですけれども、下がふえなければプロも成り立ちません。それに対して、国立青少年教育振興機構とCONEが行っているのはどちらかというアマチュアレベルで、無償でできるボランティアレベルのところですが、プロレベルも視野に入れていろいろなことを考えていかなければいけない、と思うのです。はっきりした展望があるわけではないのですけれども、何らかの形で育てていかなければいけないかなと思うのです。

**田中** 岡島理事がおっしゃるように、地域の子供たちに自然体験を初めとしていろいろな体験をさせようとする、やはりそこに指導者がいなければいけません。個々の指導者の能力や個性を大切にするとともに、実際の指導に当たっては、今の子供の特徴とか子供への接し方、安全管理といったことに関して一定の研修を受けていただいて、その力量をつけていただく必要があります。それと同時に、その指導者を束ねていろいろな事業をコーディネートする人の養成も重要だろうと思います。

**岡島** 両方要るのですね。飯田先生のところは、どちらかという指導者の指導者みたいなものですか。

**飯田** それを目指してやってきました。この間、日本野外教育学会のほうでどんな論文が出ているのかというので、大学ごとに全部出ていましたけれども、うちが19名だったか、一番多かったですね。その次が福岡大学、その次が信州大学とか筑波大学とか東京学芸大学。

**岡島** うちというのはびわこ成蹊スポーツ大学ですか。

**飯田** ええ。びわこ成蹊スポーツ大学が一番多くて19名でした。来年は1学年で30名を越えると聞いています。そういう意味では、私はびわこ成蹊スポーツ大学をつくるときに「特色ある」と「差別化」というのを言われたので、これはもう野外しかないと考えました。しかも、立地条件が、山があり、湖があって、雪が降るということで、それを専ら強調して、スタッフも、今、日本で一番多いです。ドクターを3人っていますから。そういう質を上げていけば必然的にうまくいくのではないのでしょうか。これをどうやってこれから日本中に広げていくかが課題だと思っています。

**岡島** 青少年教育研究センターの紀要も作り始めているのですが、日本野外教育学会や自然学校など多くの要素がからみ合ってスパークするようなものが生まれたらいいかもしれない。

**飯田** 平成10年ごろ、我々のこの分野でも突如として新しい波が出てきたわけですね。もう15年から20年、指導者を養成するのが大事だと言っています。では、具体的に何だったのか、本当にそのとおり成功して人数がふえているかという、実は何も無いのです。これは我々の反省なのです。もっと具体的に中長期の予測をつくっていかないとはいけません。ただ、私が思うには、今の中高年者、特に高齢者というのは、若いときは遊ぶことが何もなかったもので、自然に関係することをいっぱい体験したのです。

**岡島** 釣りとか、山登りとか、山菜とりとかですね。

**飯田** こういう世代がある程度実践で今の子供たちのことをもうちょっと理解を深め

てもらって、昔培った技術だとか、そういうものを出してもらおうと、地域社会というコンパクトな一番やりやすいところでできることが重要なのです。それは可能ではないでしょうか。そういう意味では、子どもは教育施設を持っていますので、そういうところを利用したり、いろいろできると思うのです。私は、やはり小さな地域からやっていかないと実際にはなかなかうまくいかないのではないかと思います。

**岡島** そうですね。

**田中** 平成16年から3ヵ年計画で子どもの居場所づくりを推進した時に思ったのですが、子供をきっかけにして、地域の子供は地域で育てようということで、地域の大人が協力し合うということは、同時に地域づくりにつながっているのだということです。大人が連携協力することにより地域の絆の深まり、例えば高齢者にとっても活動の場が生じ、生きがいにつながるかもしれません。子どもの居場所づくりは子どもだけの為ならずです。みんなが元気で明るい地域づくりです。

**岡島** 田中理事長、CONEのカリキュラムがあるでしょう。あの中にそういう科目を入れたほうがいいですね。

**田中** そうですね。

**飯田** そういう意味では、今の時代はいいチャンスなのですね。

**岡島** スキーでは、バッジテストといって、バッジをとると級がどんどん上がっていきます。それから、ゲートボールで優勝大会とかやっているのだけれども、地域社会の表彰を行うといい。

国立花山青少年自然の家には、大きい名札が200枚ぐらい壁に並べてありまして、人の名前が書いてあるのです。様々な分野の師範ということです。炭焼きの達人のところを見たらいっぱい名札があった。師範に認定された人は、認定証を神棚に飾っていたりします。そのような、ちょっとした地域社会の中での満足というか、誇り、子供たちをうまく導くのだという使命感というか誇り、バッジだとか賞状みたいなものとか、認定証とか、そういう意味のものが必要です。

**飯田** 多分、今できるリーダー養成の中で一番必要で、現実的にできて効果があるとしたら、それをどのようにして組織化するか、今までやっていることをどうやって全国の各地域で進めるかというのが、日本らしいリーダー養成のあり方ではないかと思っています。

**岡島** そうですね。それはどこかの拠点が必要ですから、本当は国立青少年教育振興機構にしてほしいのです。そこに民間が入っていく。だから、一つのやり方としては、成功事例を4カ所ぐらいつくって、地域の人たちがやろうと言え、村役場単位で動いてくれたりするのではないのでしょうか。

**田中** 全国でいえば、従来から体育指導委員の団体がありますね。そういう草の根の指導者の全国の組織づくりを目指すのはどうなのでしょう。

**飯田** 今、また新たにスポーツ立国とか、そういうことで出てきています。

**岡島** 自然体験だから、体育だけではなくて理科とかそういうのも入れるようなものはどうでしょうか。

**飯田** いろいろ入ってくるから、自然体験としてはおもしろい。そういうコンテストみたいなものをやったら、どんどん応募してくるのではないのでしょうか。

**岡島** 文部科学省と同時に農林水産省の農村振興などもいいのかもわかりませんね。

**田中** 今、農林水産省でも子供たちの農業体験を推進していますよね。

**岡島** グリーン・ツーリズムとかいろいろやっています。誰かがコーディネートするか、どこかの機関がコーディネートして、何かそういうことで官民協力してもよいでしょう。

**飯田** 旗振り役が必要ですよ。

**田中** ただ、残念なのは、文部科学省も、子どもの居場所づくりをはじめ青少年の健全な育成を目指して様々な取組をしてきましたが、それぞれ3年ぐらいで終了、要するに予算を倒すのです。予算がなくなると各地方での取組の多くが中止されました。根づいている地域もいっぱいあるのですけれども、全国的に見れば、もうちょっと定着してもらいたいというもどかしさがあります。

**岡島** やはり小さい単位から始めないといけないでしょうね。国からお金が出るから動くというのだと続きませんよね。

**飯田** 続かないですね。その点、私も3年するとあっという間に消えてしまうなという体験ばかりしています。長期的にきちんと目標を掲げて、例えば地域であれば、何百ある地域のうち幾つまでは3年間とか5年間でつくり上げるとか、その後は、5年後継続してそれを進めていくとか、そうしないとだめです。今みたいに対症療法的にお金だけちょっと出して、ほら、できただろう、あとは自分でやれといっても、これはできないですね。

**岡島** 今だから言いますがけれども、昔、竹下登首相がいましたでしょう。あの方に新聞記者時代、お会いする機会が随分ありました。環境問題を勉強したいというので、お話しをすることが多かったのですが、その話の中で、100カ所の村に自然学校をつかってほしいと頼んだのです。1カ所1年間3,000万円、100カ所で30億でしょう。これが10年続けて300億です。農道を2、3本作るお金でできるのだから作ってほしいと頼んだら、彼は、そうだな、なかなか新しい金は難しい、と言いました。でも、彼は動いてくれて、地方交付税交付金の中にそれを使えるようにしてくれたのです。

私は大騒ぎして10カ所ぐらいでやらせたのだけれども、残念ながら、村のほうやらないのです。それから、地方交付税交付金というのは県に行くのですが、県からどこかへ消えて、本来の目的ではないところに使ってしまうと、そちらに流れないということもあるらしいのです。村のほうでそのニュースを知って、今度はこういう交付金があるそうだけれども、と県に言えば、県はくれるのだけれども、黙っていると、村のほうにニュースが伝わっていかないうちに、県で全部使ってしまうらしいのです。それでだめになってしまったことがあったのです。

**田中** 昔、派遣社会教育主事がいたころは彼らが地域の様々な活動のコーディネーター的役割をしていました。派遣社会教育主事の制度は国が県に補助金を出し、県が市町村に社会教育主事を派遣していました。しかし、国の補助金が廃止になりその財源が地方交付税の中に移ったところ、すなわちひもつきでなくなったら、県は派遣社会教育主事を減らしたり、中止してしまいました。予算的な面でいえば、今日、地方公共団体の首長さん達に子供達の体験の重要性を認識してもらうことも大切だと思いますね。

**岡島** 今、飯田先生も田中理事長もおっしゃっていたように、結論として、地域のところから沸き立つような方法が必要かもしれないですね。

**田中** 基本的には地域の自発性、自主性ということが大事ですね。要するに、各地域で子供を契機として様々な事業をコーディネートする人がいて、地域の人々の意欲をうまく結集していくという取っかかりが必要なのですね。

**岡島** そうだと思うのですね。そこは誰がやるかということは次の課題として、今日は、そういうところが必要だという指摘をして終わりたいと思います。

今日は短い時間でしたけれども、本当にありがとうございました。

